

(令和元年十一月二十八日)

ドンカンと太鼓と鐘を打ちならし白馬はゆるり榎社を発つ (関本 美津代)

叶はぬと思ふ夢ほど叶へたし及ばぬ才を神に祈りぬ (金子 由紀子)

梅香る道真公の夢の跡そして輝くウルトラソウルハイ! (森山 真介)

バツタ跳ぶ政庁跡の秋晴れに草むらからのほのかな香り (田中 茂樹)

被われてよりは腕白七五三草履を靴に履き替え走る (白井 道義)

夏草に国寺の礎石浮かび在り山すその屋根静かに濡れる (陣内 敏夫)

秋風に香る雅な西の国芋栗南瓜どれも美味かな (中司 祐香)

蝉だつて最期のときを嘆くのに僕らとききたら知らないふりで (一島 れをな)

突然にどこからとなく飛んでくる2ミリメートルシャーペンの芯 (青山 拓実)